

Sustainable Kyushu

# さすてなぶる九州

株式会社 NRS  
代表取締役社長

エヌアールエス

## 中山卓氏

Suguru Nakayama

取引店／福岡銀行箱崎支店



# 循環型社会に向けて私たちにできること。 100年先の未来を守るために 目の前の課題に向き合う。

巨大な風力発電機がいくつも立ち並んで青い空に映える姿が目を引く、福岡県北九州市若松区の響灘沿岸埋立地。北九州市では、1997年から「エコタウン事業」と呼ばれる廃棄物ゼロを目指した取り組みが続けています。そして、この響灘地区はエコタウン事業の拠点となり、自動車、家電用品、建築廃材などのリサイクル工場、研究施設が集まって活動を続けています。

産業廃棄物の収集運搬および処理を事業の主軸として、エコタウンにおける環境事業の一翼を担う株式会社NRSの中山社長にお話を伺いました。

## 戦後の焼け野原から 鉄くずを拾い集めて

まず当社の経緯からお話しますと、事業の原点は、私の祖父母が営んでいた紙や布の問屋業です。戦後になると、焼け野原を元に戻すために鉄くずの收拾に着手して中山商店を設立。1970年代、西日本初となる鉄圧縮切断処理機を導入するなど、高度成長期を支えながらスクラップ処理業で業績を伸ばしました。

さらに、1989年には父が、廃木材リサイクル事業の中山リサイクル産業株式会社を創業。「故里地球から戴いた資源を自然に帰すそれが私達の使命です」をモットーに企業活動はスタートしました。

そして、先祖からの商人魂と故郷を想う志を引き継ぐ形で、福岡市にある中山リサイクル産業から分社化独立し、北九州市エコタウン事業の拠点であるこの地に2008年、創業したのが当社です。



最新鋭のトラックを導入

## 独自の研究開発により 高度な処理能力を發揮

当社は福岡県を中心に、西日本エリアにおいて産業廃棄物の収集運搬と中間処理事業を展開しています。

とくに産業廃棄物中間処理事業では、埋立処分量を削減するために産業廃棄物を無駄なく、最大限にリサイクルできるよう努めています。高性能破砕機を駆使した産業廃棄物中間処理施設では、地球環境への負荷を低減すべく、10mm以下まで混合廃棄物を選別可能。月7千トンの処理能力を有する廃石膏ボードリサイクル施設は、西日本最大、国内有数の規模を誇ります。さらに、独自の高度な処理技術を生み出すために、当社では常に処理フローを見直しながら、処理プラントの研究開発に注力。他社に先んじて海外から最先端機器を導入しつつ、AI化や自動化などの独自の取り組みによって設備と施設の最適化を図って築き上げた唯一無二の技術とシステムは、他社が容易に真似できないものと自負しています。

## 産廃業界の現状から見えてくる 地球環境の今後

当社が営む産業廃棄物処理業の業界市場規模は、約3兆円といわれています。同業の企業数はラーメン店よりも多いとされ、人々が生活する以上、企業が経済活動を行う限り、この業界がなくなることはありません。

その一方で、私たちが目指すべき地球の環境を考える時、廃棄物処理事業者に出番が回ってこない社会が理想。業界側から社会を見てみると、環境負荷低減に向けた廃棄物抑制の必要性が周知されるにつれ、「リユース・リデュース・リサイクル」の3Rへの意識が高まり、リユースとリデュースは進んでいる現状があります。そうになると、廃棄物としては処理が難しい物が残って、「埋めるしかない物」が増えることに。当然、埋められる場所は限られているため、結果的には、再資源化によるリサイクルに向かわざるをえない時代がやってくるのは目に見えています。厄介なのは、リサイクルにはお金がかかるという現実であり、名刺ひとつをとっても再生紙はコストがかかり、電力にしても、廃棄物の焼却

から生まれる電力のほうが割高になってしまっています。しかし、目先の損得だけに目を奪われていては、子孫が笑顔で暮らせる社会を遺すためのSDGsやカーボンニュートラルの実現など、到底できないのも事実です。

大事なものは、「それでも再生品を買う、使う」社会への転換。一人ひとりが地球環境を他人事ではなく自らの問題として捉え、環境により配慮する手段を自発的に選択していく揺るぎない意志をもつべき時に来ているのではないのでしょうか。

### 作る責任と使う責任

### 循環型社会の担い手としての意識

世界を変えるための、国際社会における共通の目標「SDGs」は、2015年に定められたものですが、私たちの事業は、それ以前から共通する課題に向き合ってきたといえます。適正処理は当たり前の話であり、限りある資源を有効活用し、地球を輝かせて持続可能な社会をつくるのが、廃棄物処理業者の役割であり、さらには、使命だからです。

Sustainable  
Kyushu



3



2



1

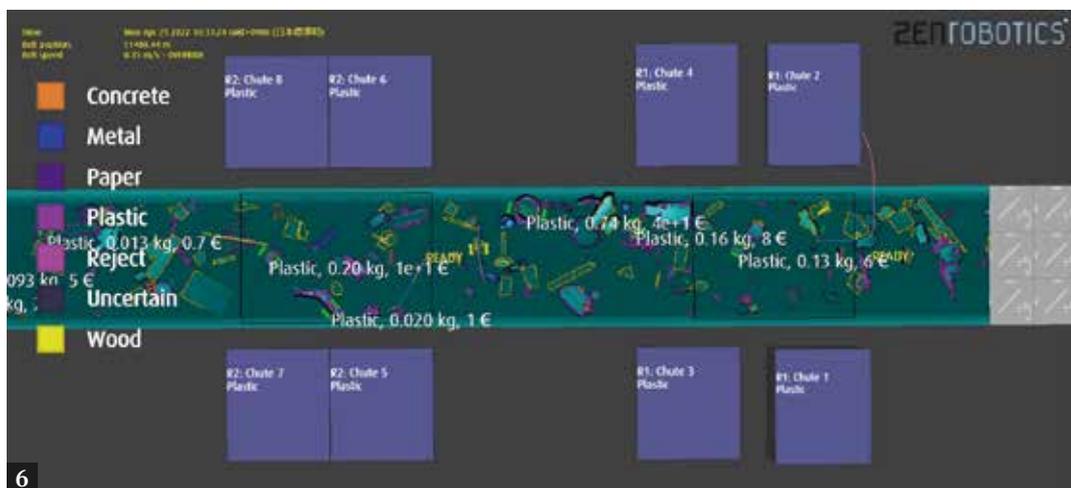


5



4

1.九州北部豪雨で活躍した移動式破砕機とフルイ機。約1年半かけて現地処理を完了させた／2.九州北部豪雨で活躍した九州に一台しかない車載型移動式選別機／3.見学通路／4.近赤外線で素材を認識・選別する光化学式選別機／5.AIを搭載した選別ロボット／6.4種類のセンサー(カラー、金属探知、近赤外線、画像)を活用し、廃棄物を素材で認識している



6



対談中の中山社長

とはいえ、地球環境保全の問題を、産業廃棄物処理事業者とそれを取り巻く業界だけで「何とかする」のは、限界に近づいているともいえます。つまり、あらゆるモノを作る段階で、破棄・処分工程まで考慮に入れて設計と製造を行えば、不要な排出物を減らせ、処分の方法に対する認識を使う側がもちやすくなる

はずです。当業界においても、選別にかかる負担が軽減され、最終処分物のみに注力すればよい取り組みに移行できます。

さらに「作る責任」と同時に「使う責任」も、これまで以上に重視され、意識されなくては意味がありません。今や家庭でのゴミ分別が当たり前の話であるように、企業単位、社会単位での取り組みも、その意識レベルで行われることで、大量生産による大量消費が生み出した大量廃棄の現状を変えていくしかないのです。

サステイナブルな循環社会を目指していくうえでは、作る者も、使う者も、そして処理する者も、全員が、つながっている輪の一部にいるわけですから、「だれかがやればいい」ではなく、「みんなでやる」「一生続けていくもの」でないという意味がありません。地球の未来という大きなテーマに立ち向かうのに、一個人や一企業、一部の業界の能力では、できることには限界があります。国連で提案された、SDGsにおける17の目標で、「17 パートナリーシップで目標を達成しよう」が最後に掲げられている理由はそこにある、と私は考えています。

## 業界を変え社会を変えるため 発信力のある企業へ

地球環境を保全する全体規模の活動へ向かうにあたって、産業廃棄物処理業界はまず、現在の価格競争から脱却して「発信力」のある立場へと進化する必要があります。そしてまず、私たちは「作る人」と「使う人」に対して、さまざまな形で発信していくべきだと考えます。

当社ではたとえば、自社ホームページ上で



全国数多くの自治体にて許可を取得している

## Sustainable Kyushu

リサイクル率の開示を行う、会社で保有する船舶を海洋清掃のために貸し出す、などの取り組みを行っています。なかでも近年、当社が力を入れている施策のひとつが「誰もが見られる廃棄物処理会社を作る」取り組みです。施設内に見学コースを設けて、他業種の企業の方にご覧いただいています。今後は、一般の方も気軽に当社の事業に触れられるようにしていくつもりです。一人ひとりの地球環境に対する関心と意識が、さらに高まるものできたらと、取り組みを進めています。

もちろん、不毛な価格競争をなくして業界を取り巻く状況を改善し、本当の意味で地球環境に配慮した社会を実現していくのは、当社単体の努力だけで成し得るものではありません。必要に応じて柔軟に連携し、自社の利益だけを追求しない。そうした姿勢があつて、ようやく実現できるものだと思います。そのため、パートナーシップを組むべき相手として「選ばれる会社」を、これからもさまざまな取り組みによって目指していきます。100年後、200年後の、すべての「廃棄物」が「資源」となる社会の到来に向けて。



株式会社NRS本社内にて、左から福岡銀行箱崎支店伊勢支店長、中山社長

### 株式会社 NRS

- 所在地：〒808-0021 福岡県北九州市若松区響町1丁目79番1
- 電話番号：093-752-6100
- 事業拠点：北九州市若松区、福岡県糟屋郡新宮町、広島市安佐北区

